

小学校外国語（英語）科が長い歴史を経て教科化され、日本の英語教育が大きく変化しようとしている。現状では、小学校に注目が集まるのは当然のこととしても、それを引き継ぐ中学校や高等学校の授業や、英語教育そのものに対する考え方に、一部の先進校や実践者を除いて、あまり変化や広がりが見られないのが現実でもある。

小学校の先生方には勇気づけと元気づけを図ることとはもちろんであるが、中学校の先生方には「なんとかしましょう！」と発破をかけるだけでは、実際に何をどうすればよいのかがつかみ切れていない状況はなかなか改善されるとは思えない。具体的な提案がないと、従来からあるお決まりとも言える、英語教育が抱える理想と現実のギャップという課題に行き着いて止まってしまうからである。

そこで、今動き出している新しい英語教育の歩みを無駄にすることなく、効果的に発展させていくことができるよう、英語教育全体に一貫性を持たせてその内容を再検討したいと考え、本研究に取り組んだ。

## 第1章 小学校外国語科実施までの歩み

先行研究として、小学校外国語科実施までを3期に分け、その歩みを探った。それぞれの時期に話題となっていたこと、実施されていたこと、現在までの経過について考察した。

小学校英語教育の歴史は、単発的であったり、幾度かの勃興を繰り返したりしてとはいえ、長い歴史をもつことが改めて明らかになった。また、多くの先行実践が行われた上で、総合的な学習の時間での「国際理解」としての登場となり、やがて外国語活動という、教科ではなく領域や活動としての扱いが始まっていく歴史をつかむことができた。そして、*Hi, Friends!* や *We Can!* などの準教科書とも言える指導教材も登場し、現在の教科書のもととなっていることも改めて認識することができた。

ただ、大きく分けると、英語教育の「英語」に重きを置く流れと、「教育」に重きを置く流れの2つがあり、そのどちらかに比重が偏っても、「英語教育」とはならない。前者で言うのなら「早期英語教育」推進派で「将来の実用のためには必要」となる。後者なら「学校教育」重視派となり、前者については、世間では英語教育熱とまで言われるくらい過度な実用教育としての期待が今改めて危惧される。同じく、後者では、小学校教員の中に「だから気軽にやれると推進する教師」と「やっても意味がないからALTや外部人材、専科教員に任せようとする教師」を産んできた。その両者を融合させて、現在の小学校英語の方向が出てきたところに学習指導要領の価値があることが改めて確認できた。

さらには豊かな情操を育む活動や体験的な学びは、全国学力学習状況調査の結果と相関があることが指摘されていた。飽和状態の小学校カリキュラムの中に、外国語科の持つ、様々な情操的体験的な要素も生かし、小学校教育の要に、無理のない範囲でなっていくことにも期待を持つことができた。

## 第2章 小中学校で使用されている6社の教科書分析

現在使用されている小学校教科書は2020年度発行であり、教科書としては各出版社共に第1号である。中学校の教科書は2021年度改訂で、文科省有識者会議からの提言を受け、その内容に大きな変化を加えて登場した第1号である。小学校と中学校で使用されている教科書を分析し、各出版社による特徴は何か、小中の系統性はどうか、中学校進学時に出版社が同じ教科書を使用する場合と、異なる出版社の教科書を使用する場合で留意することはなにかなどを検討した。

分析の視点として、小中学校で繰り返し扱われる言語材料の中から「一般動詞過去形」、言語活動の中から「人を紹介する」、題材の中から「将来の夢」を対象とした。

各教科書の共通点、相違点、関連する点が浮かび上がった。特に中学校の教科書については、学習指導要領改訂を前に、目的、場面、状況を伴った言語材料や言語活動の扱い、題材の重視を柱とするように提言されていた。それらを受けて様々な工夫がさなれ、バライティに富んだ内容となっていた。

言語材料、言語活動、題材の3つの切り口からの分析により、小中接続を考える際に留意すべきことも、各採択地区の具体例により挙げることができた。小学校から中学校に進学するときの発行会社の組み合わせにより、中学校の学習展開の工夫が必然的に迫られることになる。これは小中接続の要であると同時に、中学校の授業を問い直す大きなヒントである。小中学校の教員研修等を通して扱うべき内容であるということが改めてわかった。

## 第3章 中学校の指導の実際に関わる調査

実際の中学校現場に立つ英語科教員がどのような課題や問題意識を持って日々の指導に当たっているのかを調査する必要があると考え、中学校英語科教員88名に対して、紙ベースでアンケート調査用紙を郵送し、56名から回答を得た。

内容としては、大きくは「学習活動・言語活動」「小学校英語教育への意識」「悩みや生の声」についてである。

学習活動全般の中から、言語活動やコミュニケーション活動と呼ばれるものは、予想通り、テストや入学試験等の対策としてあまり役に立たないと捉えてしまい、遠ざけてしまう教員がいることが浮き彫りになった。講義式の授業の方があまり工夫はいらないという

ような意識を感じさせる教員もいた。しかし、入学試験そのものが変わってきていて、今の言語活動やコミュニケーションを図る活動を4技能5領域に渡って確実にやっていくことが入学試験等の力を付けていくことであるという点、を今後も学生や教員が認識できるようにする必要があると感じた。

教科書の内容や分量増を不安視、疑問視する声も聞かれた。これも予想通りであったが、その解消のために重点化や焦点化、軽重をつけた扱い、4技能5領域を統合した指導の具体を、第5章でCLILとして提案することにつなげることができた。

ただ、これ以上現場の個々の教師に負担は求められないのが現状でもあり、指導内容の焦点化、重点化と教科会による協働化を一層具体的に示していく必要性を感じた。

#### 第4章 小学校英語学習実態調査

筆者が最後に勤務した松本市立島立小学校の2021年度の3年生全員（57名）と6年生全員（55名）にアンケート調査を実施した。外国語活動として英語教育を始めて1年目が終わる3年生、まもなく中学校に入学する6年生の3月の時点での調査である。なお、この6年生の2クラスのうち1クラスは、5年生時に筆者が授業を担当した学級である。

英語学習全般に対する選択式の回答、聞くこと、話すこと、文字（読むこと・書くこと）に対する選択式の回答を求め、最後に自由記述として、6年生には中学校への期待と不安を自由記述で回答を促した。

あくまでも島立小学校の事例としてではあるものの、小学校の児童は英語が堪能で使いこなしてみせる教員にあこがれや尊敬の念をもつものの、それ以上にどんな教員に対しても授業の工夫を求めていることがわかった。小学校の学級担任は一部の専科対応を除いて、全教科等の授業を担当している。学級担任が行うことの優位性があるようにも見て取れた。また、専科教員には、児童理解が伴わないと、英語の流暢さだけでは逆効果になる可能性もあることを十分に意識しなければならない。ALTにも同じことが言える。

中学校への不安を学力面で感じてしまっている児童が多いことがわかってきた。中学校への不安をあおる指導よりも、夢や期待を持って中学校への進学を促すことが、英語教育はもちろん、全教科領域にも当てはまることであろう。今後の教員研修の面から言えば、英語のトレーニングよりも、やはり授業作り、英語を使った活動の展開を主軸に行っていくことが大切と考えられる。

#### 第5章 小学校の変化に対応した中学校言語活動の提案

ここまでで明らかになった、小学校から中学校への接続の成果や課題をもとに、小学校の変化に対応した中学校の言語活動を提案した。

小学校からの接続を図りたい、教科書を生かしたい、4領域5技能の統合的な指導によりテストや入学試験等の学力をつけたいなどが、中学校英語教員の大きなニーズであることを受け、教科書を読むことを中核に据えた CLIL（内容統合型言語活動）の展開を提案した。

さらに、SDGs と結びつけることでは、小学校との題材を通した接続を意識できること、中学生の発達段階にも合っていることがわかった。

また、筆者自身が20年以上前に実践し、研究発表も行った内容をさらに CLIL として、体系立って現在の学習指導要領に合わせて加筆修正することができた。ここにはさらにたくさんの活動の展開が考案できそうである。こうした言語活動が文科省の求める「言語活動を通して指導する」ことである。今後も研究開発を進めていく。

特に第5章の Post-Reading において行う CLIL 活動から、本研究のまとめとしての知見を得ることができた。

英語を聞くこと、話すこと、読むこと、書くことを統合的に行う言語活動となる点である。課題の達成のためには教科書を読み返すことも必然的に増えてくる。使う表現や語句などを探すこともある。これらはテストや入学試験の学力向上にもつながる大切な学習活動であるし、コミュニケーション能力を高めるための言語活動でもある。

表現できる語彙や文は限られていても、中学生の持つみずみずしい発想に加えて、CLIL によりたくさんの気づきやインプットを得て、最後のアウトプットはその生徒なりの、ほんの1文でもよいし、個に応じてかなりのハイレベルな表現も期待できる。その姿を実感したとき、中学校英語教員は、小学校の変化を受けたこれからの中学校の授業改善に向けて、入学試験等の諸課題を解決することと合わせて動き出すものと期待できる。

これらは、実は今に始まったことではなく、かなり以前から多くの実践者が行ってきた、英語教育の歴史でもあることに改めて気づいた。小学校の変化を受けて、そのことがますます強調されているのだと気づくことができた。